

原 著

聴覚障害者が手話通訳技術に対して抱いている期待の内容に関する研究

白澤 麻弓・斎藤 佐和

本稿では、手話通訳の評価と効率的な養成に寄与するため、インタビュー調査および質問紙調査によって、聴覚障害者が手話通訳の技術に対して抱いている期待の内容を明らかにした。この結果、全体的には見えていて疲れず、安心感を与えてくれる通訳で、起点談話に対して忠実な訳出が求められていた。また対象者の属性による違いとして、①通訳を頻繁に用いている者ほど、手話の間違いや癖のない、見えていて疲れにくい通訳を好む傾向にあること、②日本手話を日常的なコミュニケーション手段として用いている聴覚障害者は、通訳場面においても日本手話的要素に期待を示していること、③聾学校出身者は日本手話による通訳を求める傾向が強く、インテグレーション出身者は、手話の訂正や間違いといった無駄な動きを減らした、はっきりと見やすい手話を求める傾向にあること、④一般大学で学んだ経験のある対象者は、起点談話の内容やその場の雰囲気や忠実に伝える通訳を望んでいることなどの特徴が明らかにされた。

キー・ワード：聴覚障害 手話通訳 期待内容

I. 問題の所在と目的

手話通訳の正当な評価のためには、通訳作業に対する客観的な分析と、通訳の受け手となる聴覚障害者による主観的な評価の両面を考慮に入れる必要がある (Stauffer & Viera, 2000; Strong & Rudser, 1992)。このうち、聴覚障害者の評価を実施するためには、この前提となる聴覚障害者の手話通訳に対する期待内容を具体的に明らかにする必要があるが、こうした研究は未だ少ないのが現状である。

例えば上久保・比企・福田(1997)は、聴覚障害者約1700人に対して、口話や筆談、手話通訳の利用といった言語媒体の使用傾向や有効性を分析し、特に式典や集会など言語使用の相手が多数になる場合に、手話通訳によるサポートが必要とされていること、手話が良くわかる人

ほど手話通訳を利用する回数が多いことを指摘している。しかし、こうした場面において具体的にどのような通訳が求められているのか、手話の理解度による通訳への期待内容の違い等については言及していない。

また手話通訳士育成指導者養成委員会(1998)も、手話通訳の質的向上のために、聴覚障害者のニーズについて明らかにする必要があると主張しているものの、実際のニーズの内容については、個々によって異なることへの留意をうながす程度の段階であり、全体的な傾向や聴覚障害者の属性による期待内容の違いについては明らかにしていない。

その他聴覚障害者や手話通訳者の経験談として、通訳に対する要望について語られることは多くあるが、いずれも期待の内容は個々によって異なることが強調されるあまりに、全体的な傾向や属性ごとの違いについては検討されてお

らず、手話通訳者が目指すべき通訳像が十分に定まっていないのが現状である。

そこで本研究では、インタビュー調査および質問紙調査によって、聴覚障害者が手話通訳者の通訳技術に対して抱いている期待の全体的傾向および聴覚障害者の属性による差異について検討することとする。特に近年高等教育機関に進学する聴覚障害者の数が増加し、ここ数年の差別法規徹底運動ともあいまって、高等教育機関や各種専門分野など新たな通訳ニーズの高まりが顕著になってきている。日常生活上の通訳に比較して、こうした高等教育分野での通訳は対応が立ち遅れていることが指摘されているが(白澤・徳田, 1999a, 1999b; 全日本聾唖連盟・日本手話通訳士協会・公正証書遺言問題弁護団, 1998)、高等教育場面あるいは各種専門に特化した場面において、若い世代の聴覚障害者がどのような通訳を望んでいるか、それはこれまで実践的に行われてきた生活場面での通訳とどのように共通し、また異なっているのかをあわせて明らかにすることを目的とする。

II. 手話通訳の期待に関するインタビュー調査 (予備調査)

1. 目的

インタビュー調査を通して、聴覚障害者が手話通訳に対して抱いている期待について幅広く意見を収集し、その内容を把握するとともに、本調査における質問紙を作成する。

2. 方法

1) 対象者

(1) 手話通訳の受け手(聴覚障害者)

関東地方に在住する聴覚障害者4名。これまで聴覚障害者を対象に手話通訳に対する期待内容を調査した研究がほとんどなかったことを踏まえ、手話通訳に対するニーズが特に高く、かつそれを明確に表現できる聴覚障害者を対象にしたいと考えた。そのため、職場や大学講義などで頻繁に手話通訳を利用しており、かつ手話通訳者の養成や派遣にかかわりを持っている者で、手話通訳に対する期待やニーズを明確に

提示できることを基準に対象者を選択した。

対象者のうち、1名は聾学校出身で、残りの3名は小学校もしくは中学校以降地域の学校に在籍してきていた。いずれの対象者も、それぞれ自分の専門に関わる分野で週1～3回以上手話通訳を利用しており、通訳者の力量によって本人に対する評価が左右されてしまうことが多いため、手話通訳技術に対しては敏感であると語っていた。

(2) 手話通訳者

本研究の目的は聴覚障害者自身の期待の内容を把握することであるが、通訳される元の情報を受け取ることができない聴覚障害者にとって、実際の通訳現場での通訳の実態を完全に把握することは困難であると考え、予備調査では手話通訳者4名の意見も参考にした。手話通訳者はいずれも県の登録手話通訳者資格を取得しており、日常的に通訳活動に関わっていた。また、うち3名は厚生労働省が認定する手話通訳士資格を保持しており、通訳経験も特に豊富であった。残りの1名は通訳経験は長くはないが、週3回以上と頻繁に通訳を行っており、自身通訳研究に携わっていることから、手話通訳技術を分析的に観察できると判断した。

2) 手続き

聴覚障害者、手話通訳者が一同に会し、自由討論によって手話通訳への期待に関する意見を収集した。その際、初めから期待の内容を列挙することは困難であると考え、討議材料として通訳事例を提示し、視聴後に「通訳事例に対する印象」や「そのように感じた理由」などを話してもらい、これをきっかけとして「自分だったらどのような通訳をしてほしいか」を尋ねる形とした。また、ビデオから得られた印象以外に、日常的に感じていることがあれば、補足して話をしてもらった。

また、聴覚障害者、通訳者双方に、他人の前では言い出しにくい意見もあると考え、発言をする以外に質問紙を配布して感じたことがあれば自由に記入してもらうよう教示したが、これを利用した者はいなかった。

意見の聴取はすべて手話を用いて行われ、話し合いの様子はデジタルビデオカメラ(SONY HANDYCAM TRV5)を用いて収録された。調査は2001年4月に実施し、ビデオの視聴や自己紹介等を含めて約5時間に渡って意見を聴取した。

3) 通訳事例

白澤(2002)および白澤・斎藤(2002)にて収録したデータを通訳事例として用いた。ここでは1人の話者が1方向に話している場面を題材(以下基談話とする)として用い、これを聞いて6名の通訳者が日本語から手話への同時通訳を行っている場面をデジタルビデオカメラ(SONY HANDYCAM TRV5)を用いて収録した。収録に用いた起点談話は全体で8分程度であったが、対象者には事例ごとにはじめの2分間程度を提示した。ビデオデッキの操作は実験者が行い、各事例ごとにビデオを見終わった後、自由に意見を出し合ってもらった。また、必要に応じて他の事例と通訳作業の内容について比較検討したり、同一箇所を繰り返し見るなどの調整を行った。

3. 手話通訳に対する期待の内容

得られたデータを元に、手話通訳の評価に関わる意見を抽出したところ、全体で207件の意見を収集することができた。これを手話通訳士資格を持つ通訳者2名で内容の類似したもの同士を分類した結果、「手話表現に関する意見(58件)」、「通訳上の技法に関する意見(53件)」、「全体の印象に関する意見(34件)」、「情報量や信頼性に関する意見(31件)」、「通訳のわかりやすさに関する意見(28件)」、「雰囲気や伝達に関する意見(11件)」の6つに分けることができた。分類後の結果をTable 1に示す。

ここから、まず第一に手話通訳に対する期待の内容は非常に多岐にわたっており、手話表現に対する評価も多いが、それ以外の異なった要素を多分に含んでいるということが明らかになった。すなわち聴覚障害者にとってもっとも目に付きやすい手話表現に関する意見が最も多く、全体の約30%を占めていたが、同程度の割合で聴覚障害者には見えない「通訳上の技法に

関する意見」も多く挙げられていた。手話表現に関する内容としては、従来より通訳養成場面で指摘されてきた(手話通訳士育成指導者養成委員会, 1998)「手話表現の工夫」に関する意見は9件と少なく、むしろなずきなどの「非手指動作」に関する意見や手話表現の無駄な「癖」に関する意見が多数述べられ、これら二つで手話表現に関する意見の半数を占めていた。このことから、一つ一つの語をどう表すかといった手話表現の技術ももちろん必要であるが、これ以上に文章の統語構造を示す非手指動作や手話自体の見やすさといった部分が重要な評価の観点となっていることが示唆された。

通訳上の技法に関する意見の中には、原文の日本語にこだわらずに適度に文章をアレンジしてほしいといった「文章のアレンジ」や、省略すべき情報を省略し、強弱をつけて訳出してほしいといった「ポイントの強調」に関する意見が多くあげられていた。しかし、これらについてはインタビューの際に「特に学会など話されている内容を正確に聞きたい場面ではむしろない方がよい」との意見も聞かれており、場面によって要望が変わってくる項目であることが予想された。

他に、「頭の中で日本語に翻訳しなくても自然と内容が入ってくる通訳をしてほしい」、「そわそわせずに自然に安心してみられる通訳をしてほしい」、「大事な語句を省略せず、細かい部分まで伝えてほしい」などといった意見も複数の聴覚障害者から多く挙げられており、手話通訳を評価する際に聴覚障害者自身が重視しているポイントであることがうかがえた。

4. 質問項目の作成

本研究で得られた207項目にわたる結果を、調査者と手話通訳士資格を有する手話通訳者の2名で、内容が重複していたり、類似しているものを整理したところ、101項目に集約することができた。その後、さらに聴覚障害関係の研究者3名(うち1名は手話通訳士)により、長南(1999)、Taylor(1993)等を参考に、手話通訳に対する期待を問う項目として適当であるかを検

Table 1 手話通訳に対する期待の内容

手話表現 (58件)	非手指動作(18)	ろう者の手話からうまく表現を借用している(2)、イントネーションがある、手話のリズム、イントネーションがある(4)、上体や頭が動くがそれぞれの動きに意味がある、うなずき・間・表情・瞬き・状態のそらしといった非手指動作の使い方が上手(4)、非手指動作などの日本手話文法を持っている(2)、うなずきや間がはっきりしてわかりやすい(2)、手話文法として正確である(2)
	癖(13)	全体的に見ていて疲れない(3)、不必要な目線の動きが少ない、手話が安定している、無駄なぶれがない、長く見ていられる、オーバーアクションになっていない(3)、手話が小さくスリムにまとまっている(2)、手話の数が少ないわけではないがゆったりしている
	表現の工夫(9)	たくさん言語のバリエーションを持っている、写像的な表現ができる、空間の利用ができてい、ろう者の手話に似ている、表情が豊かである(3)、表現の工夫がある(2)
	ロールシフト(7)	登場人物の違いを明確に表すことができる、ロールシフトを用い直接話法的に表示できる(3)、どういう立場で通訳しているのかわかる、格の変化がある、正面を向いているのではなく変化がある(2)
通訳上の技法 (53件)	流暢性(7)	手話が読み取りやすい(3)、文中に不自然な間が生じない(2)、手話がはっきりとしている、非流暢な部分が目立たない
	手話口形(4)	口形が必要以上に大きすぎない、無理に口形をなくそうとしている様子が見られない、日本語借用部分や強調したい単語にのみ日本語口形を用いそれ以外は手話口形を用いている(2)
	通訳者によるアレンジ(14)	難しい言い回しや用語にこだわり過ぎない、相手に合わせて必要な情報を選択できる、通訳者自身が文章をアレンジしてくれる、多少ゆがみがあっても楽しく見ていられるほうが良い、その場を盛り上げられる通訳をしてほしい、言語以上に演技力が加わっていてエンターテイナーのよう、少しぐらい演技が入ってもかまわない、原文の日本語にこだわり過ぎない(2)、通訳者自身が手話として分かりやすく伝えるために補足している情報がある(2)、ろう者にとって理解しやすい方法を見つけている、語りかけるような雰囲気がある、情報を投げかけてくれるような感じを受ける
	ポイントの強調(14)	省略すべき情報の判断ができてい(2)、省略する際の優先順位づけ方が適切、手話で表さなくてもいい部分の省略が上手、重要な語句を強調して通訳している、重要な語句と例文などの補足的な部分の区別ができる(3)、強調すべき部分をはっきりと表せている、文中に強弱がある、語のポイントをつかんでいる、全体的に単調でない(2)
	通訳テクニック(5)	状況に応じて省略や圧縮的な表現や言い換えができる、逐語的な翻訳と句や文レベルでの翻訳を使い分けられる(2)、スピードをコントロールできている、ポイントとなる語に良い手話があげられる
	文章構造の表示(4)	テーマの切れ目がはっきりわかる、場面の転換がわかる、文の構造や話の展開がわかりやすい(2)
	まとめ方(4)	通訳者が文章をきちんと理解している、通訳者に日本語力がある、日本語を聞いてすぐに理解できる、手話の技術にあったまとめ方ができる
	間のとり方(4)	文末に間がある(2)、文の切れ目がはっきりとわかる(2)
	臨機応変(4)	場に応じて臨機応変に対応できる(2)、いろいろな場面や聴覚障害者に合わせられる、通訳のパターンにバリエーションを持っている
	確認(4)	わかりにくい部分で確認作業がある、アイコンタクトがある、きちんと通じる手話になっているかの検証ができる、表した手話が通じたかどうか判断できる
全体の印象 (34件)	おちつき(16)	自然に見ていられる(2)、壁々と前を向いて通訳している、そわそわしていない、不安を感じさせない(3)、ゆったりした姿勢で通訳している、気持ちに余裕が感じられる(2)、見栄えがする、にこやかに通訳している、見ていてイライラしない、見ていてホッとする、落ち着いてみていられる、手話や通訳の技術を気にかけることなく、安心して内容を見ていられる(2)
	抑圧(7)	距離が近すぎない、押し付けがましくない、おせっかいな面を感じない、圧迫感がない、通訳を見るように強要しない、ときどき視線をそらしてくれる、ろう者の確認/同意を必要以上に求めない
	通訳に対する態度(6)	一生懸命さが伝わってくる、自分の世界に浸るのではなく相手に合わせて通訳してくれる、伝えようと言う気持ちが見える、目を見て通訳してくれる(3)
	パーソナリティ(5)	年代が同じである、気持ち通じる、対等に話せる、気遣いに頼める、謙虚な姿勢を持っている
情報量信頼性 (31件)	情報量(11)	追従しきれずに脱落したりしない、省略が少ない、情報の漏れが目立たない(2)、大事な語句を省略しない、細かい情報まで伝えてくれる、文章が途切れず文のはじめとおわりがつながっている(2)、手が止まっている時間が短い、全部伝えようとしてくれる、「ただ聞いている」という間がない
	情報の正確さ(7)	通訳者の判断で情報量を操作しない、通訳者が勝手に解釈して伝えることがない、説明をあれこれ付加しない(2)、うそやごまかし・情報の漏れがない、情報が信頼できる、通訳者個人の感情を表に出さない
	日本語の伝達(7)	専門用語などを日本語として伝えてくれる、日本語にそって口形をつけてくれる、日本語が忠実に伝わってくる(2)、日本語を聞いているような通訳ができる(2)、ひとつひとつはっきりと口形を表してくれる
	忠実さ(6)	原文に忠実である(3)、専門的内容まで忠実に伝えてくれる、原文を正確に反映している
わかりやすさ (28件)	自然に読める(12)	読み取った内容を頭の中でもう一度再構成しなくても良い(2)、読み取って理解するのに時間がかからない、手話を読み取った後ポイントが何であるか改めて考える必要がない、頭の中で日本語を考えなくても良い、内容について考える余裕がある、思考が途切れな、自然に頭に入ってくる(2)、手話として頭に入ってくる、口形に頼らなくても内容が伝わってくる(2)
	理解しやすい(6)	何が言いたいのかが良くわかる(2)、主題がはっきりとつかめる(2)、話に引き込まれる(2)
	考えられる(6)	内容について考える余裕を与えてくれる、情報を受け取って考えることができる(2)考え理解する間を与えてくれる、通訳を見ている間に聴覚障害者が反応できる(2)
	わかりやすい(4)	わかりやすい(2)、主題から発展してふくらみがある、細かいところまで内容が伝わってくる
雰囲気伝達 (11件)	雰囲気伝達(7)	話し手や話の雰囲気が伝わってくる(4)、例と本題で表情などの変化がある、冗談なのか本気なのかかわかる、その場の雰囲気に合った通訳をしてくれる
	リアルタイム(2)	その場で何が話されているのかをリアルタイムに伝えてくれる(2)
	聴者と同等の参加(2)	周りの聴者と同じように内容を楽しめる、通訳を見ているろう者が聴者と同等の印象を受けられる(2)

Table 2 期待の内容を問う 55 項目

項目 1 安心してみられる通訳をしてほしい	項目 23 重要な部分と補足的な部分の表現に強調をつけてほしい	項目 39 日本語にこだわらずにその場合った手話表現を使ってほしい
項目 2 その場の雰囲気を読まざり伝えてほしい	項目 24 手話にあわせて日本語対応でない口形を使用してほしい	項目 40 手を止めずにできるだけたくさん情報を伝えてほしい
項目 3 その場で何が話されているのかをリアルタイムに伝えてほしい	項目 25 たくさんの手話語彙を身に付けてほしい	項目 41 話されている情報を 100%漏らさずに伝えてほしい
項目 4 見ていて自然に頭に入ってくるような通訳をしてほしい	項目 26 日本語にとらわれずに手話として自然なスピードで表してほしい	項目 42 文章の途中で途切れないでほしい
項目 5 話し手がどういった雰囲気で話しているのかを伝えてほしい	項目 27 通じているかどうかどうもろろ者の表情などを見て判断してほしい	項目 43 通訳者が情報を違えるのではなく、原文に忠実に訳してほしい
項目 6 圧迫感を与えない通訳をしてほしい	項目 28 話の中の何人かの登場人物を演じ分けてほしい	項目 44 原文の言い回しをそのまま忠実に伝えてほしい
項目 7 親しみやすさが感じられる通訳をしてほしい	項目 29 文章をアレンジしてわかりやすく伝えてほしい	項目 45 必要な語句を省略しないでほしい
項目 8 謙虚な姿勢をもって通訳をしてほしい	項目 30 講演者の伝えたいことがわかるように説明を加えてほしい	項目 46 話の要点以外に細かいところまで内容を伝えてほしい
項目 9 ひとつひとつの表現をはっきりと表してほしい	項目 31 細かな部分にこだわらず必要な情報だけを提示してほしい	項目 47 ひとつひとつ日本語にそった口形を表してほしい
項目 10 訂正、手話の間違いを減らしてほしい	項目 32 難しい言い回しや用語をかみ砕いて伝えてほしい	項目 48 講演者が日本語として何と言ったのかをきちんと伝えてほしい
項目 11 見ていて疲れない表現をしてほしい	項目 33 語の繰り返しや余分な表現を省略して伝えてほしい	項目 49 意味をよりはっきり伝えるために接辞詞や語句を付け加えてほしい
項目 12 一生懸命さが伝わってくる通訳をしてほしい	項目 34 長い文章は途中で切ったり、2 つ以上の文をまとめて表してほしい	項目 50 必要な部分を落とさずに伝えてほしい
項目 13 文の途中で不自然に止まらないでほしい	項目 35 原文のあいまいな表現は、明確な言葉に言い換えてほしい	項目 51 情報に間違いやずれを生じさせないでほしい
項目 14 文ごとの切れ目をはっきり表してほしい	項目 36 手話として理解しやすいように語順を入れ替えてほしい	項目 52 通訳者自身が自分の解釈を付け加えたりしないでほしい
項目 15 手話表現の無駄な癖をなくしてほしい	項目 37 忠実に訳したり、まとめながら訳すなど臨機応変に使い分けてほしい	項目 53 専門用語などは日本語として伝えてほしい
項目 16 オーバーアクションにならないでほしい	項目 38 話の要点を強調して伝えてほしい	項目 54 場面や話題が変わったことをはっきり伝えてほしい
項目 17 まゆのうごきやうなずき、表情などの非手指動作を使用してほしい		項目 55 必要以上にたたくさんの手話をあらわさないでほしい
項目 18 同じ手話でも繰り返したり強弱などの変化をつけてほしい		
項目 19 手話に強弱やリズムをつけてほしい		
項目 20 表情を使って程度や感情を表してほしい		
項目 21 物の形や特徴をとらえて映像的に表現してほしい		

討し、最終的に55項目を本調査の質問項目として使用することとした。これらの項目を Table 2 に示す。

Ⅲ. 手話通訳の期待に関する質問紙調査

1. 目的

聴覚障害者に対する質問紙調査を通して、手話通訳の受け手となる聴覚障害者が、手話通訳に対して抱いている期待の全体的傾向を把握するとともに、個々の聴覚障害者の背景の違いによる差異について検討する。

2. 方法

1) 対象者

職場の会議や大学の講義等で、手話通訳を日常的に使用していることが多い、20～40代の聴覚障害者で、高等教育機関に在籍した経験のあるものや職業的に手話通訳を必要とする可能性の高い聴覚障害者群を想定し、T大学附属聾学校同窓会130名、T技術短期大学同窓会101名、全国聴覚障害者教職員連絡協議会82名、T技術短

期大学学生44名の計357名に回答を依頼した。

2) 手続き

インタビュー調査の結果に基づいて作成された質問紙を、本研究の対象者に郵送し、回答を求めた。質問紙は手話通訳に対する期待を問う55項目と、回答者の属性を尋ねる項目の2種類であった。

手話通訳の期待に関する項目では、それぞれについて「とてもよくあてはまる」「あてはまる」「どちらともいえない」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」の5段階評定を採用した。また、回答者の属性に関する項目としては聴力、コミュニケーション手段、教育歴、通訳利用頻度、通訳利用場面をとりあげた。

なお、調査実施期間は2001年7月から9月であった。

3) 分析方法

手話通訳に対する期待の内容に関しては、各項目における5段階評定のうち「とてもよくあてはまる」を5点、「あてはまらない」を1点と

Table 3 回答者の教育歴（教育段階ごとに百分率で表示）

単位：%

※聴覚障害者のための高等教育機関である筑波技術短期大学を含む。

教育機関	教育相談	幼稚部段階	小学部段階	中学部段階	高等部段階	大学
ろう学校*	33.1	52.4	46.9	54.0	62.7	39.8
地域の学校等	7.8	25.9	39.4	36.6	33.7	19.3
難聴学級	3.6	1.8	13.1	8.7	0.6	0.0
医療機関	10.8	0.6	0.0	0.6	0.0	0.0
その他	6.0	0.6	0.6	0.0	0.6	12.0
なし	38.6	18.7	0.0	0.0	1.8	28.3

して得点化し、対象者全体の平均および対象者の属性による違いを分析した。また、対象者の属性による回答の差を検討する部分では、ピアソンの χ^2 検定を用いて有意差検定を行った。詳しい分析方法は各結果とともに以下の各項で述べる。

3. 結果と考察

1) 回答者のプロフィール

回答を依頼した357名のうち166名より有効回答が得られ、回収率は46.5%であった。回答者のプロフィールは以下のとおりであった。

(1) 聴力・コミュニケーション手段

回答者の聴力の状態を把握するため、左右の平均聴力を尋ねた。この結果、80dB以下の難聴者が数名存在するものの、約85%の対象者が聴力90dBから110dBの間にあり、ほぼ全体が社会生活上手話通訳の利用を必要としている層であった。

日常的に使用しているコミュニケーション手段として、相手が聴覚障害者同士の場合と手話のわかる聴者、手話のわからない聴者に対する場合の3つの場面に分けて、それぞれ用いる手段を3つまで尋ねたところ、Fig. 1に示すとおり、聴覚障害者同士の場面では日本語手話を用いるとした者と日本語対応手話を用いるとした者がほぼ同程度(約30%)存在した。また手話がわかる健聴者に対しては、やはり日本語手話や日本語対応手話を用いるとする意見が半数を占めていたが、聴覚障害者に対する場面と比較して日本語手話を使用すると回答した者の割合が減っており、発声や読話を用いるとする意見が増加し

ていた。さらに、手話がわからない聴者に対するコミュニケーション手段としては、発声、読話、筆談を用いるとする者がほぼ同程度ずつおり、少数ではあるが手話も用いると回答している者もいた。

(2) 教育歴

回答者の教育歴を明らかにするため、教育相談から大学の各課程において、どのような教育機関で教育を受けてきたのかを尋ねたところ、Table 3に示す結果が得られた。対象者のうち約33~38%は小学部から高等部にかけて地域の学校でインテグレーションを経験しており、難聴学級に在籍していた者を加えると、小学部および中学部段階では壘学校出身者とそれ以外の者でほぼ同程度の比率となっていた。

また、短期大学や筑波技術短期大学(聴覚障害者のための短期大学)を含む何らかの高等教育機関に在籍していたものは、全体の約60%と比較的多く、一般の4年制大学で教育を受けたものは19.3%であった。

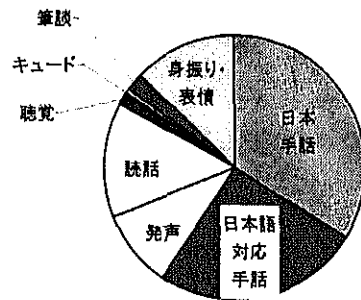


Fig. 1 回答者が用いているコミュニケーション手段(聴覚障害者同士の場合)

(3) 手話通訳の利用状況

回答者の手話通訳の利用状況として、ここでは通訳の利用頻度および利用場面を尋ねた。まず、各回答者が主催者団体等で手話通訳が準備されている場合を含めて、どの程度の頻度で手話通訳を利用しているかを尋ねたところ、Fig. 2に示す結果が得られた。この結果、月数回利用すると回答した者がもっとも多く30.1%で、週数回、週3回以上を含め、月に1回以上は通訳を使用していると回答した者が全体の約60%を占めていた。また週3回以上通訳を受けている者が全体の11.4%おり、この多くが職場の会議や研修でほぼ毎日通訳を必要としていると回答していた。

ただ、年数回しか用いないとする者も30%程度おり、今回の対象者のように比較的多く手話通訳を使用していると考えられる聴覚障害者群

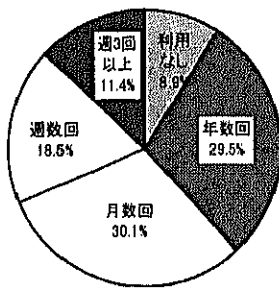


Fig. 2 手話通訳の利用頻度

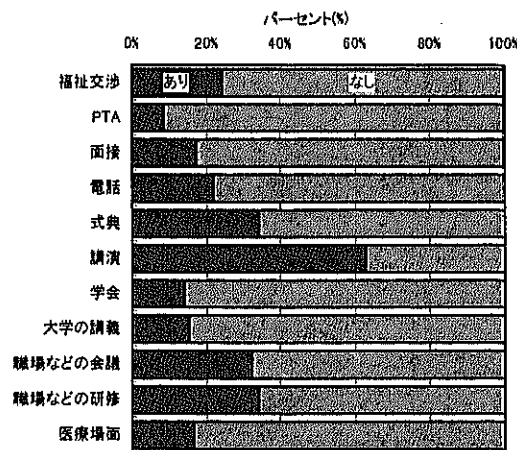


Fig. 3 手話通訳の利用場面

であっても、手話通訳の利用率はあまり高くはないことがわかった。

次に手話通訳の利用場面として、福祉交渉、PTA、面接、電話、式典、講演、学会、大学の講義、職場などの会議、職場などの研修、医療場面のそれぞれの場面で手話通訳を日常的に使用しているかどうかを尋ねたところ、Fig. 3に示すとおり、講演会や式典など、あらかじめ主催者側で通訳が用意されていると考えられる場面での利用頻度が特に高く、特に講演場面では60%の回答者が使用するとしていた。このほかに通訳を利用する場面としては、職場などの会議や研修、福祉交渉などが比較的多くあげられていた。

2) 手話通訳に対する期待の内容

手話通訳に対する期待の全体的傾向を明らかにするため、各項目への回答の平均値を算出したところ、Fig. 4のような結果となった。この結果、どの項目に対しても平均3以上の得点が表示されており、いずれの内容も通訳作業にとっては必要であるとみなされていることがわかった。また、標準偏差の値はいずれも0.83から1.29と低く、全体的にばらつきは少なかった。その上で、「安心してみていられる通訳をしてほしい(項目1, 4.28)」「見ていて自然に頭に入ってくるような通訳をしてほしい(項目4, 4.21)」といった全体的な見やすさ、わかりやすさに関する項目では高い値が表示されていた。また、「見ていて疲れない表現をしてほしい(項目11, 4.04)」「ひとつひとつの表現をはっきりと表わしてほしい(項目9, 3.86)」など手話が与える印象に関する項目でも安定して高い値が得られており、受け手に不安を与えないはっきりとした見やすい通訳が求められていた。

一方、非手指動作や手話の表現技術に関する項目では、項目によって若干の差があり、「手話にあわせて日本語に対応していない口形を用いてほしい(項目24, 3.27)」で他に比較して低い値が取られていたが、それ以外ではおおむね3.8程度の中程度の期待が表示されていた。

これに対して、「文章をアレンジしてわかり

やすく伝えてほしい(項目29, 3.24)」、「語の繰り返しや余分な表現を省略して伝えてほしい(項目33, 3.29)」といった、通訳上の技法のうち通訳者による文章のアレンジに関わる項目では、全体の中でも比較的低い値が示されており、通訳者による言い換えや省略の少ない忠実な通訳を望んでいるように見受けられた。しかし、同じ通訳上の技法に関する項目であっても、「忠実に訳したり、まとめながら訳すなど臨機応変に使い分けてほしい(項目37, 3.78)」、「話の要点を強調して伝えてほしい(項目38, 3.98)」などのポイントの強調に関しては比較的高い得点が示されていることから、完全に起点談話を逐語的に手話に変換することを求めているものではなく、起点談話のうち重要な部分では、その内容を強調しながら、かつ忠実に訳し、そうではない部分は必要に応じて省略や言い換え等を用いながら訳出するなどの臨機応変な作業が求められていることが示唆された。

また、情報の量や信頼性に関わる項目には、情報の量、忠実さ、日本語の伝達、正確さなどがあり、項目によって得点のばらつきが大きかったが、特に「必要な部分を落とさずに伝えてほしい(項目50, 4.52)」「情報に間違いやずれを生じさせないでほしい(項目51, 4.42)」などの通訳の正確さに関わる内容が高い値を示し、脱落や誤りなく起点談話の内容を正確に伝えてほしいとの期待が強く示されていた。

また、「通訳者が情報を選ぶのではなく、原文に忠実に訳してほしい(項目43, 4.12)」「講演者が日本語として何といったのかをきちんと伝えてほしい(項目48, 4.13)」という原文に対する忠実さに関する項目でも比較的高い得点が得られていた。しかし、これを実現するための手段である口形の表示に関しては、「ひとつひとつ日本語にそった口形を表わしてほしい(項目47, 3.47)」など期待が低く、また「原文の言い回しをそのまま忠実に伝えてほしい(項目44, 3.83)」に対しても得点が高くはないことから、形式上の忠実さではなく、原文に対する内容的な忠実さを求めていることがうかがえる。

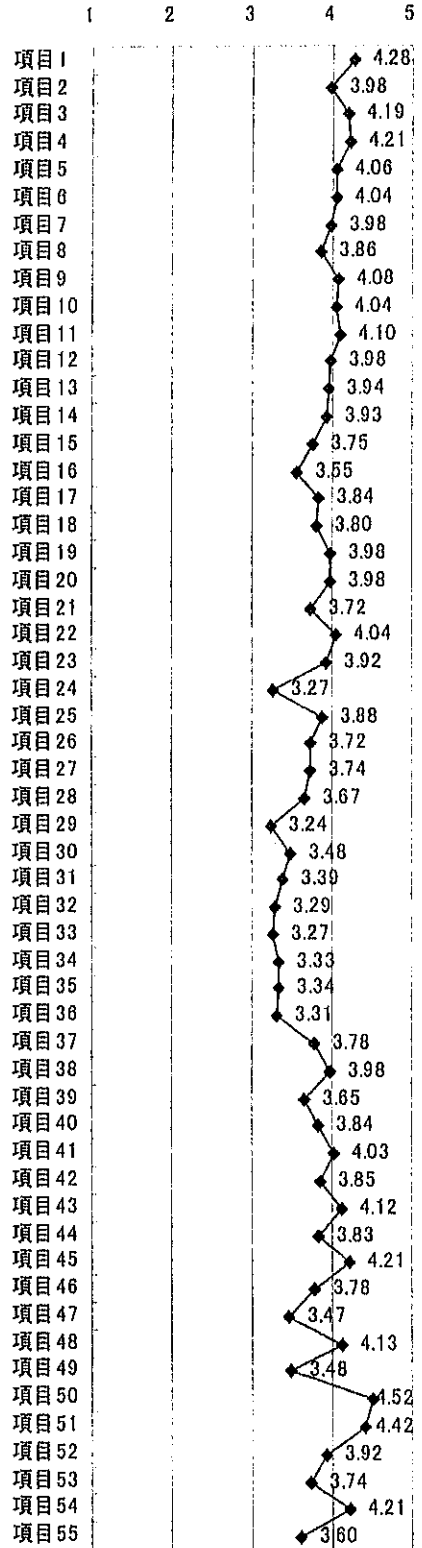


Fig. 4 手話通訳に対する期待の全体的傾向

一方口形に関しては、日本語に対応したものが求められていないのと同時に、先に述べたように手話にあわせた口形に対する期待も低くなっていた(「手話にあわせて日本語に対応していない口形を用いてほしい(項目24, 3.27)」。手話を表出する際に用いられる口形には、「日本語に対応した口形」や「手話に独特な口形」、あるいは「強調表示に用いる口形」などいくつかの種類があることが知られているが(関根・赤堀・福島・福田, 1998)、聴覚障害者全体の期待としては、これらの口形のうち1種類のみを訳出全体にわたって用いるのではなく、訳出している内容や重要度など臨機応変に使い分けることの必要性が示唆される。この使い分けの方法については、インタビュー調査の中で「日本語借用部分や強調したい部分では日本語に対応した口形を用い、それ以外では日本手話文法としての口形を使用してほしい」との記述が得られているが、これが聴覚障害者全体に共通するものであるかについては調査の範囲では明らかではなく、さらに詳細な調査が望まれる。

以上のことから、聴覚障害者全体の手話通訳に対する期待の傾向として、手話がはっきりしていて、安心して見ることができ、情報の量や日本語に対する形式的な忠実さ以上に、起点談話に対して内容的に忠実であり、より正確な通訳が求められていることがわかった。また、通訳の方法としては原文に対する意味的な忠実さを保ちながらも、重要な部分ははっきりと強調してかつ忠実に伝え、そうでない部分では必要に応じて省略や言い換えなどの技法を用いながら適度にまとめて訳出していくことが求められていた。通訳中の使用手話に関しては明確な示唆が得られなかったが、これは対象者によって期待の内容が異なる部分であると考えられるため、対象者の属性と絡めてより詳細に検討していく必要があるだろう。

3) 対象者の属性による期待内容の違い

手話通訳に対する期待の内容は、対象者の属性によって異なると考えられる。ここでは、対象者の違いによる期待内容の違いについて分析

するため、コミュニケーション手段、教育歴、通訳利用頻度、通訳利用場面のそれぞれの属性において、対象者を群に分け、手話通訳に対する期待内容がどのように異なり、また共通しているかを明らかにした。対象者の属性については、このほかに聴力を尋ねたが、対象者のほとんどが平均聴力レベル90dB以上の高度聴覚障害を有していたため、グループ化して比較することは不適当であると考え、今回の分析からは除外した。また、群間差の有意差検定にはピアソンの χ^2 検定をもちいた。以下に、期待内容に群ごとの偏りが見られた項目を中心にその結果を列挙する。

(1) 手話通訳の利用状況による違い

対象者の属性のうち、手話通訳の利用頻度による違いでは、頻繁に用いているものとそうでないもので期待内容が異なると考え、週に数回以上通訳を用いている対象者と年数回以下しか用いない者に分けて比較した。この結果を Fig. 5 に示す。図中利用頻度の高い群の各項目に対する期待の平均を四角、低い群の平均を菱形で表わし、見やすさのためそれぞれ線で結んだ。この結果、利用頻度の高い聴覚障害者の方が、少ない聴覚障害者に比較して、手話の間違い(項目10, $\chi^2=13.0$, $df=4$, $p<.01$)、癖(項目15, $\chi^2=10.9$, $df=4$, $p<.05$)など、手話の見やすさや全体的印象に関わる項目でやや高い要望を示し、その偏りは統計的に有意であった。また、圧迫感(項目6)やオーバーな動き(項目16)といった項目においても比較的高い要望を示していたことから、見ていて疲れない表現を好む傾向にあることがわかった。これは日常的にごく頻繁に通訳を用いているために、通訳を通すことによる疲れやストレスをできるだけ減らしたいと考えているものととらえられた。

(2) コミュニケーション手段による違い

対象者のコミュニケーション手段としては、特に使用手話の違いによって日本手話を使用するものと日本語対応手話を中心に用いるものでは通訳に対するニーズが異なると考えられた。そのため、聴覚障害者同士、あるいは手話のわ

かる聴者とのコミュニケーションにおいて日本手話を用いるとした対象者と、そうでない者をそれぞれ比較したところ、聴覚障害者同士の会話で日本手話を用いる者と日本語対応手話を中心とするそれ以外の手段を用いるもので結果に偏りが見られた。この結果を Fig. 6 に示す。

この結果、聴覚障害者同士の会話において日本手話を用いるとした対象者はそうでないものと比較して、やはり「表情を使って程度や感情を表してほしい(項目20, $\chi^2=11.2$, $df=4$, $p<.05$)」「たくさんの手話語彙を身につけてほしい(項目25, $\chi^2=14.0$, $df=4$, $p<.01$)」「日本語にとらわれずに手話として自然なスピードで表してほしい(項目26, $\chi^2=13.0$, $df=4$, $p<.05$)」など通訳時の手話表現に対して高い要望を示していた。これはおそらく本人が日常的に使用しているような日本手話あるいは日本手話文法を多く借用した中間的手話を求めているものと考えられ、こうした期待に対応できる通訳者を養成する必要性が示唆された。ただし、情報のゆがみのない忠実な通訳を求めている点(項目50-52)では両者一致しており、使用手話が変わっても求める情報の内容は同一であることが推察された。

(3) 教育歴による違い

手話通訳に対する期待の内容と教育歴との関連については、特にろう学校出身者と難聴学級を含むインテグレーション出身者との間で期待内容に違いがあるものと考え、各教育段階においてこれら二つの群を設定してその偏りを分析したところ、いずれも期待内容に違いが見られ、特に高等教育段階ではその差がより明確に見られた。この結果を Fig. 7 に示す。この結果、ろう学校に在籍していた対象者は、コミュニケーション手段として日本手話を用いていた対象者と同様、手話表現に対して比較的高い要望を示していたが、「手話に強弱やリズムをつけてほしい(項目19, $\chi^2=18.1$, $df=4$, $p<.01$)」以外は統計的には有意ではなかった。他に、「その場の雰囲気や漏らさず伝えてほしい(項目2, $\chi^2=11.5$, $df=4$, $p<.05$)」「話し手がどういった雰囲気話しているのかを伝えてほしい(項目5, $\chi^2=11.0$,

$df=4$, $p<.05$)」などの雰囲気やの伝達に関する項目で、ろう学校出身者が比較的高い値を示しており、よりその場で話し手が話している雰囲気を伝える通訳を望んでいることがわかった。また、統計的には偏りが認められなかったが、インテグレーション出身者は手話の訂正や間違い(項目10)、不自然な間(項目13)、オーバーな動きといった項目(項目16)で、ろう学校出身者に比べてやや高い値を示す傾向があり、訂正や不自然さの少ない見やすい手話を望んでいることが示唆された。

一方、教育歴のうち、高等教育段階の属性の違いとしては、一般大学で学んだ経験のある対象者と経験のない対象者で比較したところ、期待内容に偏りが認められた。この結果を図8に示す。この結果、一般大学で学んだ対象者は、「文章をアレンジしてわかりやすく伝えてほしい(項目29, $\chi^2=24.3$, $df=4$, $p<.01$)」「難しい言い回しや用語を噛み砕いて伝えてほしい(項目32, $\chi^2=14.2$, $df=4$, $p<.01$)」等の項目で他と比べて低い値を示し、統計的にも有意であった。ここから、談話内容をなるべく忠実に伝える通訳を望んでいることがわかる。しかし、「空間を活用して主語や目的語を明確に示してほしい(項目22)」「話の中の登場人物を演じ分けてほしい(項目23)」などの項目で期待の度合いが高いなど、手話表現に対する期待の内容はこれ以外の聴覚障害者と変わりがなく、他の聴覚障害者と同程度に日本手話の文法的要素を取り入れてほしいとの期待が示されていることから、必ずしも日本語対応手話によって原文をそのまま伝えることを望むものではないと考えられる。これらの対象者が求めている忠実さや、またその期待を満たすために必要な通訳作業の内容は、本研究の範囲からは明らかではないため、実際の通訳作業とこれに対する期待の充足度とを対応させて、さらに詳細に分析する必要があるだろう。

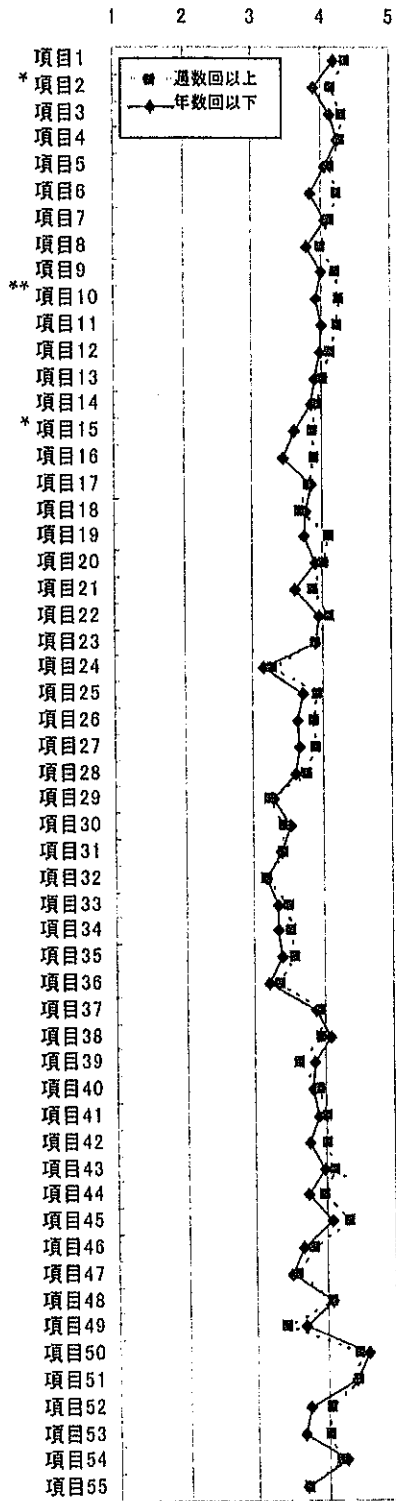


Fig. 5 手話通訳の利用頻度による期待内容の違い (* $p < .05$, ** $p < .01$)

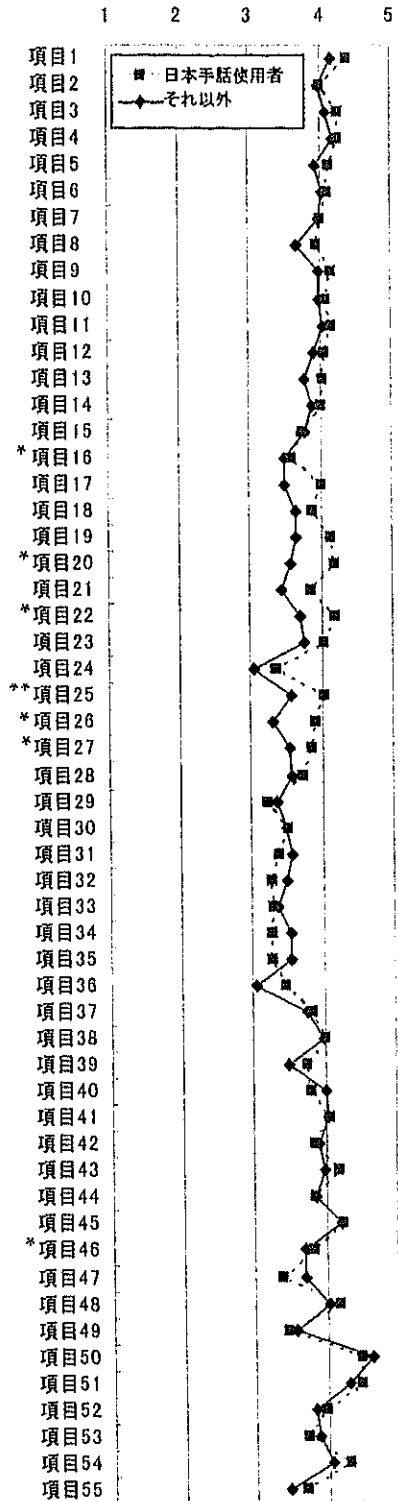


Fig. 6 コミュニケーション手段による期待内容の違い (* $p < .05$, ** $p < .01$)

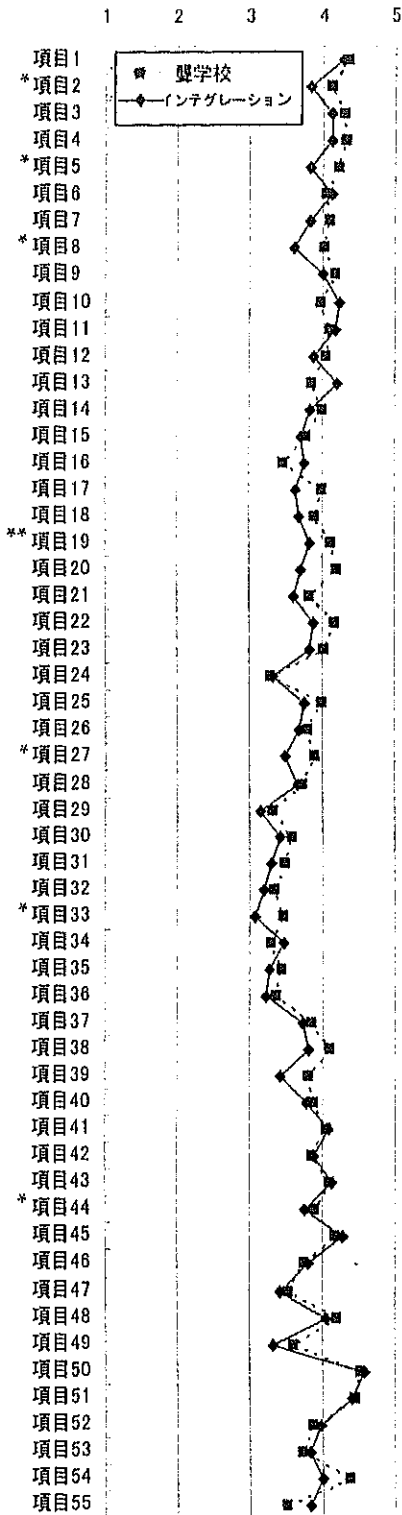


Fig. 7 教育背景による期待内容の違い
(* $p < .05$, ** $p < .01$)

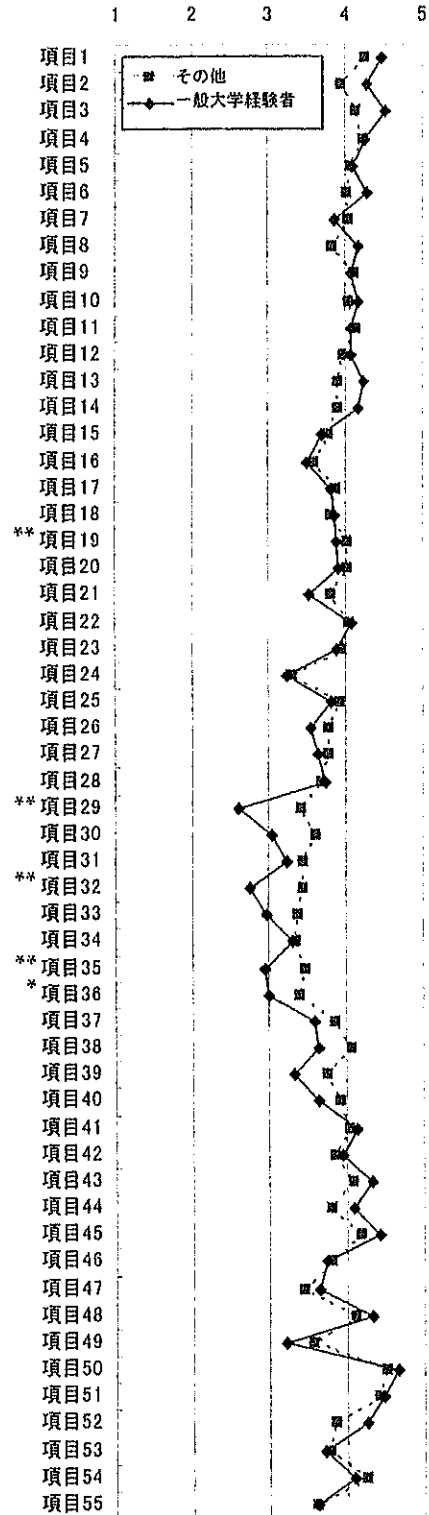


Fig. 8 一般大学経験の有無による期待内容の違い
(* $p < .05$, ** $p < .01$)

V. まとめ

本稿では聴覚障害者に対するインタビュー調査および質問紙調査によって、通訳の受け手となる聴覚障害者が手話通訳に対して抱いている期待の内容を明らかにするとともに、聴覚障害者の属性によって期待内容がどのように異なっているのかを検討した。

この結果、まずインタビュー調査より聴覚障害者の手話通訳に対する期待の内容は非常に多岐にわたり、これまで特に重視されてきた手話表現に対する評価以外に、起点談話を聞いて手話に変換する際に通訳者が加えている変換作業の内容や、全体的な印象、情報の量や信頼性なども重視されていることがわかった。また、手話表現についても、手話通訳の評価ポイントとして手話通訳士育成指導者養成委員会(1998)が提示した「豊かな語彙とその選択」、「表情」、「主語の明確化」などの7指標以外に、これまではこれらの指標の中に含まれ、抽出して取り上げられたことのなかった文章の統語構造を示す文法マーカーとしての非手指動作や全体的印象なども重要なポイントとして挙げられていた。

次にこれらの手話通訳に対する期待内容のうち、各項目がどの程度重視されているかという視点から質問紙調査を行ったところ、予備調査の結果採用された55項目に対しては、いずれも中程度以上の期待が示されていたが、文章のアレンジに関する項目では、期待の度合いが低くなっていた。また、各項目に対する期待の高さを総合的に解釈すると、聴覚障害者全体の手話通訳に対する期待の傾向として、特に手話の訂正や間違いが少なく、自然に内容が頭に入ってくるような見ていて疲れない通訳で、かつ起点談話に対して忠実な通訳が求められていることがわかった。ただし、必ずしも起点談話の日本語をそのまま忠実に伝えることが求められているものではなく、意味的な忠実さを保ちながらも、重要な部分ははっきりと強調し、そうでない部分では必要に応じて省略や言い換えるなどの柔軟な対応が求められていた。

手話通訳に対する期待の内容は、対象者の属性によって異なり、①週数回以上ごく頻繁に通訳を用いている対象者は、年数回以下と利用頻度が少ない対象者と比較して、手話表現の間違いや癖のない、見ていて疲れない通訳を好む傾向にあること、②聴覚障害者同士の会話で日本手話を用いるとした対象者は、そうでない対象者よりも通訳においても日本手話や日本手話文法を多く借用した手話を求めていること、③聾学校出身者はインテグレーション出身者に比較して、日本手話による通訳を求める傾向が強く、同時にその場の雰囲気や話し手の雰囲気を伝えてほしいという期待を示し、インテグレーション出身者は、手話の訂正や間違いといった無駄な表現をできるだけ減らし、はっきりと見やすい手話で通訳してほしいとの要望を持っていること、④一般大学で学んだ経験のある対象者は、談話内容を忠実に伝える通訳を望んでいることなどが明らかになった。

これまで手話通訳の養成場面では、日本手話を用いる対象者には、日本手話でまとめながら通訳を行い、日本語のわかる対象者には日本語対応手話で原文の内容を忠実に伝える必要があるという考え方が一般的であった。しかし、本研究の結果からは、聴覚障害者全体のニーズとして日本手話の文法を借用した表現に対する期待が示され、日本語の形式をそのまま伝えるなどの期待は見られないことが明らかになった。また聾学校出身者や日常的に日本手話を用いる対象者が、通訳場面においても日本手話や日本手話文法を多く借用した手話を望んでいることは確かであるが、これらの対象者も「必要な部分を落とさずに伝えてほしい」「情報に間違いやずれを生じさせないでほしい」「原文に忠実に表してほしい」などの項目で他の聴覚障害者と同程度に高い期待を示していることから、談話内容を要約するなどまとめながら通訳を行うことを望んでいるわけではなく、日本手話を用いた場合であっても、そうでない場合と同程度の情報を求めていることが示されていた。一方、大学経験のある対象者の場合、起点談話に忠実

な通訳を求めていたが、これは必ずしも日本語対応手話によって原文との形式的な一致を求めるものではなかった。またインテグレーション出身者の場合は、聾学校出身者と比較して手話通訳者の用いる手話に対して異なるニーズがあることは示されたが、そのことは必ずしも日本語対応手話使用への要望と結びつくものではないことが示唆された。

以上のことから、従来実施されてきた手話通訳の養成の方針には、聴覚障害者、特に現在増加しつつある職場や大学等の専門機関で通訳を用いる聴覚障害者の期待の現実に沿わない部分もあることが示唆される。手話通訳に対する期待内容は最終的には通訳を受ける個人によって異なるものであるが、本研究の結果、全体的な回答のばらつきは少なく、聴覚障害者の属性によってある程度の傾向が把握できることが示された。そのため、今後はより詳細に聴覚障害者のもつ期待内容を明らかにしていくとともに、期待の充足度を高めるための通訳作業の内容を明らかにし、これを基盤にした養成カリキュラムの開発を進めていく必要があると考えられる。

謝 辞

本研究を進めるにあたって、データの収集にご協力いただきました聴覚障害者および手話通訳者の皆様に深謝いたします。なお、本研究は平成12年～14年度科学研究費補助金(特別研究員奨励費、課題番号05336)による研究成果の一部です。

文 献

- Cokely, D. (1992) *Interpretation: A sociolinguistic model*. Linstok Press, Silver Spring.
- Davidson, P. M. (1992) Simultaneous interpreting research: past, present and future. *Interpreting Research*, 3, 23-42.
- 上久保恵美子・比企静雄・福田友美子 (1997) 聴覚障害者による言語媒体の場面に応じた使い分け—一口話・手話・筆談と手話通訳者の有効性—, 特殊教育学研究, 34(4), 11-18.

- 日本手話通訳士協会 手話通訳士実態調査委員会 (1994) 手話通訳者・奉仕員の養成・派遣制度に関する調査および手話通訳士実態調査報告. 全日本聾唖連盟.
- 関根智美・赤堀仁美・福島和子・福田友美子(1998) 日本手話における口形表現の役割. 日本手話学会第24回大会予稿集, 82-85.
- 白澤麻弓 (2002) 日本語—手話同時通訳における作業内容の分析—日本語から手話への変換作業を中心に—, 通訳研究, 2, 63-86.
- 白澤麻弓・斎藤佐和 (2001) 日本語—手話同時通訳に関する文献的考察—音声同時通訳研究との比較から—, 心身障害学研究, 25, 197-209.
- 白澤麻弓・斎藤佐和 (2002) 日本語—手話同時通訳における作業内容の分析. 特殊教育学研究, 40(1), 25-39.
- 白澤麻弓・徳田克己 (1999a) 大学における聴覚障害学生に対するサポートの内容に関する研究 1. 障害理解研究, 3, 41-50.
- 白澤麻弓・徳田克己 (1999b) 大学における聴覚障害学生に対するサポートの内容に関する研究 2. 実践人間学研究, 1, 27-34.
- Stauffer, L. K. & Viera, J. A. (2000) Transliteration: A comparison of consumer needs and transliterator preparation and practice. *Journal of interpretation*, 61-82.
- Strong, M. & Rudser, S. F. (1992) The Subjective Assessment of Sign Language Interpreters. *Sign language interpreters and interpreting*, 1-14.
- 手話通訳士育成指導者養成委員会 (1998) 手話通訳の理論と実践. 全日本聾唖連盟.
- 手話通訳認定基準等策定検討委員会 (1986) 手話通訳認定基準等策定検討委員会中間報告.
- Taylor, M. M. (1993) Development of a diagnostic assessment instrument for English to American Sign Language interpretation. Doctoral dissertation, University of Alberta.
- 長南浩人 (1999) 手話表現能力尺度作成の試み. 日本手話学会第25回大会予稿集, 76-79.
- 全国手話通訳問題研究会 (1996) 手話通訳者の実態と健康についての全国調査.
- 全日本聾唖連盟・日本手話通訳士協会・公正証書遺言問題弁護団 (1998) 民法969条改正をめざして—公正証書遺言と聴覚障害者—.

—— 2003.8.28 受稿、2003.12.3 受理 ——

Deaf People's Expectation for the Sign Language Interpretation Skills

Mayumi SHIRASAWA and Sawa SAITO

This paper investigated deaf people's expectation for the skills of sign language interpretation, by interviews and questionnaires to develop better evaluation and effective training program. As a whole, interpretation that does not make them tired, that makes them feel at ease, and that is equivalent to original speech was expected by deaf people. Further analysis based on subject's background showed following features: 1) Subjects who often use interpreters tend to like interpretation that does not make them tired from interpreters' signing peculiarities or errors. 2) JSL users likely to expect interpreters to use more JSL grammatical components. 3) Subjects learned in deaf school tend to prefer interpretation using JSL rather than signed Japanese, although subjects from mainstream schools prefer clear sign without corrections or errors. 4) Deaf people mainstreamed in universities or colleges had needs to close translation from original message or speaker's atmosphere.

Key Words : Deaf, Sign Language Interpretation, expectation